

綾の照葉樹林

1 照葉樹林とは

熱帯から亜熱帯、暖温帯にかけての湿潤地帯には、常緑で広い葉をもつ常緑広葉樹林が出現する。熱帯から亜熱帯の常緑広葉樹が一般に大型で薄い葉をもつものに対して、暖温帯の常緑広葉樹は小型で厚い葉をもつ。また、葉の表面がロウ質の発達したクチクラ層で被われ、陽光を受けるとテカテカ光ることから「照葉樹」とも呼ばれている。

照葉樹は、主に東アジアの夏雨型（夏に雨が強く、温暖多湿となる）の暖温帯湿潤地帯に出現する。照葉樹林を構成する主要な樹木は、ブナ科のシイやカシ類、クスノキ科のタブノキ、ツバキ科のヤブツバキやサカキなどである。このなかであってヤブツバキはもっとも冬の寒さに耐えることができ、日本の広範囲の地帯に分布していることから、照葉樹を代表する樹木と言うことができよう。

照葉樹林は低地を中心に古くから人間による干渉を強く受けてきたため、原始林に近い照葉樹林は極めて少ない。我が国では主に九州南部に残存しているのみで、その面積も極めて狭く、また急峻な地形下にあるものが多い。原始状態で比較的まとまった面積で残存している照葉樹林としては、鹿児島県の屋久島、宮崎県の綾町周辺、長崎県の対馬などがあげられる。

2 照葉樹林は日本文化の原点

一般に日本文化の起源は言語や民族、考古学など様々な角度から論じられてきた。そう

したなかにあって照葉樹林文化論は、植物生態と民俗文化を結び付けたユニークなものである。

照葉樹林帯と呼ばれる森林地帯は、ヒマラヤの南麓部からアッサム、東南アジア北部の山地、中国雲南省の高地、更に揚子江の南側の山地を経て、日本列島の西南部と東アジアの暖温帯の一带に広がっている。

これら照葉樹林帯には多くの民族が住んでいるが、その生活様式の中には、多数の共通する文化要素が存在している。中国の南部には広大な照葉樹林帯が広がっているが、この地方の農山村の風景から食生活にいたるまで、日本の照葉樹林帯の農山村のそれにびっくりするほど類似しているという。即ち山の植生は、カシ、シイ、クス、タブそして草にいたるまで似ている。そして、その中で営まれている生活文化—餅、お茶、酒類、しょう油、コンニャク、納豆、絹の文化まで酷似しているのである。また漆の文化も照葉樹林帯に共通する特徴である。麴を使ったお酒、みそ、しょう油、それからねばねばした餅・納豆の文化もすべて照葉樹林に源を発しているのである。

古来日本の古里に点在する鎮守の森、この森の大半を形成しているのも、シイやカシ、タブノキといった照葉樹である。その土地とそこで生活する人々を鎮護する神を敬い祝う祭りの文化も、照葉樹林の鎮守の森から誕生したのである。

照葉樹林文化の歴史は古く、稲作文化に先行するという。要するに照葉樹林文化は縄文

時代・弥生時代よりも早い日本文化のルーツ、原点と考えることができる。照葉樹林文化は日本らしさや日本がどこから来たのかといういわば日本伝統文化の原点、基層を物語り示唆していると言えるのである。

3 綾の照葉樹林

宮崎県綾町の照葉樹林は、中心部（コアゾーン）の面積約1,700ha、周辺部（バッファゾーン）を加えると約3,500haで国内最大規模となっている。また、暖温帯では世界の北限に位置すること、あるいはこれほどまとまった規模の樹林は他にないことなどから、世界的にみても大変貴重な存在となっている。

綾の照葉樹林は、90種以上の植物種から成っており、その多様性を誇っている。その生態系は、三段階の素晴らしい林相を保っている。即ち、カシ、シイ、タブ、クスなど8m以上の高木樹林。ヤブツバキ、ヤマモモ、ユズリハなど3～8mの亜高木。そして山ツツジ、サカキ、サザンカなど3m以下の低木に分かれ、美しい景観を呈している。またニホンカモシカの生息地南限にあたり、クマタカやイヌワシ、アカショウビンなどの希少動物も生息するなど動植物の宝庫ともなっている。

今でこそ世界遺産登録候補地選定の最終選考に残るなど、その価値は高く評価されているが、かつて伐採の危機に瀕したことがある。国が国有林部分の伐採を決めたことによるが、これに対し当時の郷田町長が行政面から町が保護することを主張、これを阻止し、危機を乗り切ったのである。

その後昭和60年に、綾町は「照葉樹林文化都市宣言」を行うに至る。宣言の具体的内容は次の3箇条である。

- ・照葉樹林文化について深い理解を持つように努めます。
- ・照葉樹林文化に関する生産や生活の伝統的様式を大切に保存します。
- ・照葉樹林文化が持つ内容を現代的に生かすようにします。

郷田氏は、照葉樹林の保護、保存行政を推進するだけでなく、照葉樹林文化における食生活文化を自然生態系農業として受けとめ、今日では常識化した有機農業による里づくり行政を実践したのである。郷田氏の考えはその後も受け継がれ、綾町では照葉樹林の自然生態系を保護し樹林を守ることを目的に、照葉樹林文化を考えるシンポジウムを毎年開いている。

かつて「夜逃げの町」と言われた綾町に今では年間130万人もの観光客が日本の原風景を求めて訪れる。隠れた自然保護の学習地となっているのである。

世界的に貴重な森林として評価を受ける「綾の森」が現在、保護（世界遺産登録）か開発（電力会社の鉄塔建設）かのはざまで大きく揺れている。世界遺産登録を目指した市民運動は活発で、「10万人署名運動」は所期の目標を突破した。また保護の重要性がテレビニュースの全国版で取り上げられるなど、その関心は大きい。しかしその一方で既に一部鉄塔建設は始まっている。「電力の公益性を優先するのか」それとも「世界的にも希少価値である森とその景観を守るのか」、賛成、反対の議論は尽きない。またその是非は早計には結論付けられないが、一度崩れたものを元に戻すことは容易ではない。その点を肝に銘じ慎重に事を進めることが必要であろう。

（細田治彦）